

駕屋が二人呆ぼたやりして居る處へ南の方から、結城袖の着物に茶献上の博多帯、焦げ茶の節織、極く地の厚いお羽織と云、風態。手拭を大盡被りにした上品なお老人とじよりが、小さな風呂敷包みを首筋へ括り付けて雪駄履き。チャラ〜。チャラ〜。

『若し旦那さん。お駕は何うでござす。朝からアブレとりまんで、お安うお供いたします。』

『何ちや私しに云ふてなかつたのかナ。ウツカリして、濟まなんだ。ウム駕に乗れと云ふてなさんのかい、乗せてお貰ひ申さんでも無いが。何處まで往きなさんナ。』

『へえ。そらもう旦那さんの仰有る處まで、何處へでもお供いたしますので、へえ。』

『ア、左様か。なりや一つ乗せて頂きまへう。』

『大きに有難ふさんで。相棒。結構な事や無いかい。今時値も定めずに乗る様な人は滅多にあらへんお腹物氣やしんイ附けよ。へえ旦那邊とちへ。』

『南から來ましたんぢや。南へ戻る筈は無からう。マ北向いてボツ〜往かんせ。』

『あ、左様でござすか。相棒。さ肩入れるで、宜えか……ハイ頼たあツそ……エ、旦那さん、どの邊まで……。』

『北の方へお頼ふ申します。』

『ア、左様でござすか……何や往く先が解らんと頼り無いナ。え、矢つ張り大阪まで……。』

『ぢやらう。』

『へえ』

『多分さうなるぢやらう。』

『へ、へ、へ。どうぞお騷りなはらんと。』

『いや決して騷るのや無い。行く先きは無いのや。』

『ア、左様でござすか……相棒確かりして、呉れよ。怪おかししい具合やでこら……旦那さん、行く先きも定さめで、そら甚い難儀だすがナ。』

『アハ、へ、へ。まア宜えがナ。何處までとも往くと云はしやつたに依つて乗せてお貰ひ申した。ま、歩いてたら何うにか成らうかい。』

『そんな空々じやう漠々はくした事。……大體そんなら、何をしに歩いてござつたんで……。』

『甚ふ氣に成ると見えるナ。實は何しに來たと云ふ考へも無いのぢや。唯退屈紛れに今朝早ふ、和泉の佐野から堺まで駕で來ましたのぢやが、乗り草疲れたので駕を歸して、住吉まで歩いて來た處を、あんた方に呼び止められて、何のあても無しに乗つたまでぢや。然し駕屋さん、大阪には立派なお茶屋さんが仰山に有るさうぢやナ。』

『そりやモウ、大きなお茶屋は澤山にムります。新町の吉田屋、北陽きたの綿富わたなんど、申しましたら、